

「陪審官諸君、實際さうでせうか。當夜、その家には五人の人がゐた。中、三人は全然責任がない——被害者、老グレゴリイと、其妻と。後に残るは被告とスメルヂヤークフとである。検事はあらゆる嫌疑からスメルヂヤークフを除外せんと決心してゐるものの如くである。だから、被告以外何人も罪を被せるものがないのである。」

「成程スメルヂヤークフは、ただ被告とその兄弟、及びグルーシヤによつて嫌疑を掛けられたに過ぎない。が、吾々は決着的ではないが極めて暗示的な證據の數々を持つてゐる。第一、彼は事件の當日發作を起した。次に彼は裁判の前夜急に自殺した。最後に今日法廷に於て、被告の兄弟によつて提出された驚くべき立證である。私はイヴン・カラマゾフが妄想症にかかつてゐるといふ検事の言は承認する。が、兎に角其處に彼の名が持ち出された。そこに何か神秘的なものが暗示されてゐる。……」

「検事は、スメルヂヤークフの性格を精密に批判された。が私は何うもそれに一致する事が出来ない。私は自分で彼を訪問して、一二談話を交したが、全く異つた印象を受けた。成程彼の健康は弱い。が、性格や精神に於ては検事の言はれるやうな弱い男ではない。彼は怯懦でもなければ單純でもない。極めて邪念の多い、野心家で、復讐的な、嫉妬深い人間だと私は思つた。彼は親を恨み、自分の身を耻ぢてゐる。」

「臭いリザゼータの子供だ」と言はれた時は齒を食ひ縛つてゐた。グレゴリイの恩も感じてはゐない。彼はロシアを呪つて、フランスへ行つてフランス人にならうと空想してゐた。彼は高慢な心を持つてゐた。で、彼が自分をフヨードル・パブロフツチの私生兒であると知つては、公正兒の息子達と比較して自分の地位境遇を憤らざるを得ない。彼等はあらゆる物を持つてゐる。自分には何もない。彼等は凡ゆる權利と遺産とを持つてゐる。自分は一料理番に過ぎない。彼はフヨードルを手傳つて、封筒に金子を入れたといふ。その金子があれば彼は、自分が一代の計畫を立てることも出来るのだ。彼は無論その金の用途を忌はしく思つたらう。その上彼は三千ル

ーブルの紙幣を目で見た。一時に大金を執念深い野心家に見せたらどうなるでせう？……

「検事はスメルチャーコフが發作を伴う理由はないと言はれた。さうだ、彼は伴らなかつたかも知れない。發作は自然に來て自然に去つた。病人は充分恢復したといふではないが、兎に角意識を回復した。その時老グレゴリーが聲を限りに「親殺し！」と叫んだ。スメルチャーコフはそれを聞いて眼を覺した。で、寢臺から起上つて、別に定まつた目的もなく、何事ぞと、聲のする方へ行つてみた。主人の窓に灯が點つてゐる。彼は主人から聲の次第を訊いた。彼の心は急に引立つて來た。さうしてゐる間に、だん／＼亂れた頭の中に一つの考へが——怖ろしい、誘惑的な考へが形作られる。老人を殺して三千ルーブルを奪ふ。罪は若主人に被せようといふのである。發見される畏れがないと思ふと、金子に對する怖ろしい慾望は益々募らざるを得ない。スメルチャーコフははいつて行つて、その計畫を實行した。何んな

兇器で？ 庭で拾つた石で澤山である。が、何んな目的で？ 三千ルーブルは彼にとつて、一生の計畫を意味する大金である。お私もまた自家撞着をしてはならぬ——金子は存在したかも知れない。恐らくはスメルチャーコフ一人その在所知つてゐたのである。で、床の上に落ちてゐた封筒に就ては？……

「私は今、検事がカラマゾフのやうな不慣れた盗人であればこそ床の上に封筒を残した。スメルチャーコフならそんな事はあるまいと、微妙な所論を吐いて居られるのを聞いた時、何だか自分のよく知つてゐることを又聽かされた様な氣がした。私は同じ議論を、同じ推測を、二日前にスメルチャーコフ自身の口から聞いたのである。その上可怪しいのは、彼はそれを私が私自身の考へだと思ふやうに、言々その説を私に暗示した。詰り私に吹込まうとしたのだ。彼は豫審の際にも同じ考へを檢事に吹込んだのではないでせうか？……

「では、グレゴリーの細君のお婆さんは夜つびて病人の唸る聲を傍で聞いた。これ

は何うだと言はれるかも知れない。が私はある婦人が終夜犬が庭で泣いて、眠らないで困ると言つてゐるのを聞いた事がある。が可哀想に、犬は一夜の中に一度か二度泣いただけであつた。さういふことは極めて有り勝ちのことと言はなければならぬ。

『で、検事は又、スメルチャーコフが遺書の中に白状してゐないのは何ういふ譯だと訊かれた。が、果して良心が彼を自殺に追ひ遣つたのでせうか。自殺は悔恨を意味しない。寧ろ絶望を意味する。絶望は復讐的になり得るかも知れない。一度手を自分の上に加へた時、一生妬んでゐた人間に對する憎悪は倍加して感せられるかも知れない。……』

『陪審官諸君、正義の誤用を警戒せられよ。今の私の所論に何處に無理があるか、矛盾があるか？ あるならそれを指摘して下さい。もしまた私の假定の中にほんの少しでも可能性の影、眞實の影でもあつたら宣告を見合せて下さい。だが、これは影

でせうか？ 私は神に誓つて言ふ、私は今諸君に述べた殺人に關する私の説明を堅く信じてゐるのである。殊に私の腹立たしく思ふのは、被告に反對する山の如き事實のうち、一として確實な、破り難いものがないといふことである。しかも不幸な被告はさういふ事實の山積によつて罰せられようとしてゐる。諸君、貴方がたには縛するも釋すも絶對の權利が與へられてゐる。が、權利が大なるだけ、その責任も大なるものがあることを注意して下さい。』

此時演説は稍大きな賞讃の聲に遮ぎられた。傍聴人は皆辯護士の眞摯な辯説に動かされたらしい。その拍手の終るを待つて、彼は再び辯論を續けた。『私は一瞬間と雖も彼の潔白を疑はない、併し今假りに我被告が親殺しの罪を犯したとすることにしよう』といふ假定の下に、彼は改めて、フョードルの無情酷薄、親としての些の義務をも盡さなかつたことを述べて、「これが果して眞正の意味で父と言はれようか」と言ひ、一斤の胡桃を貰つた恩を二十三年間忘れなかつた者が、果して生みの

父の恩を忘れるであらうかと言ひ、もしさうした犯罪があつたとしても「斯かる殺人は殺人ではない。勿論親殺しでもない。さう言ふならばそれは偏見である」とまで極言した。更に、被告が恩義を知る念に厚い事を述べて、何卒彼に大きな恩恵を與へられるやうにと説いた。

「一人の罪なき者を罰するよりは十人の罪ある者を宥せ！ これぞ香高き吾等の歴史が教ふる壯嚴な聲ではないか。不肖なる私が今更言ふまでもない言葉ではあるが、ロシアの裁判は單に刑罰の爲にのみ存在する者ではない、罪人の救世主として立つてゐるのである！ 今や被告の運命は諸君の手にある。ロシアの正義の運命も諸君の手にある。諸君はそれを護らなければならない、救はなければならない。それが善き人々の手にある事を立證しなければならぬ！」かう言つてフエチユコ并ツチは辯論を終つた。傍聴席の感激は暴風雨のやうに破裂した。女ごもは皆泣いた。男の多くも泣いた。二人の大官さへ涙を流してゐた。裁判長は仕方なしに、鈴を鳴ら

すのを控へてゐた。

やがて辯護士の説に對する檢事の駁論があり、次に、再び辯護士の簡單な反駁があつて、最後には被告が發言を許された。

ドミトリイは立上つた。彼は肉體的にも精神的にも怖ろしく疲れ切つてゐた。朝はいつて來た時の元氣は更になかつた。彼はこの日、彼がその時まで理解してゐなかつた非常に重大な或るものを啓示するやうなものを初めて経験したやうに見えた。彼の聲は弱つてゐた。もう先刻のやうに叫びはしなかつた。彼の言葉には何やら新しい調子があつた。それは謙讓と、敗北と、服従との調子であつた。

「陪審官諸君、此の上私は何も申すことはありません。私の裁判の日が來たのです。私は自分の上に神の手の置かれてゐるのを感じてゐます。路を踏み誤つた人間の最後が來たのです！ けれども私は神の前に立つてゐる時のやうに諸君に申します。私は父親の血には關係はありません、私に罪はありません！ なほ最後に繰り返し

て言ひますが、私が殺したのではありません！ 私は路を踏み誤りましたが、善を愛してはゐたものです。私は始終正しい路にはいらうと努力してはゐながらも、矢張り野獸のやうな生活をしてゐました。私は検事に感謝します。検事は私に就て、私の知らない事を澤山に述べて下さいました。が、私が父親を殺したといふのは間違ひです。それは検事の間違ひなのです！ 私はまた辯護士にも感謝します。私はその辯論を聞き乍ら泣きました。が、私が父親を殺したといふのは間違ひです。また殺したと假定してみる必要もありませんでした！ それから醫者の言葉も信じないで下さい。私は正氣なのです。ただ心が苦しんでゐるだけなのです。若し諸君が私を赦して下さいさるなら、若し諸君が私を釋放して下さいさるなら——私は諸君の爲めに祈をあげます！ 私は立派な人間になることを誓ひます。神の前で誓ひます。が、もし罰せられても——私は自分の頭上で劍を折ります。劍を折つて、その破片に接吻いたします！ けれども私を赦して下さい。私から私の神を奪はないで下さい！

私は自分を知つてゐます。私は怨みます！ 私の心は苦しんでゐます……わたしを赦して下さい！」

彼は殆ど倒れるやうに椅子の中に沈んだ。彼の聲は途切れた。陪審官たちは相談のために退席した。法廷は一時休憩を宣した。傍聴人はどやどやと人波を打つた、殆ど夜の一時にも近かつたが誰一人歸る者はない。誰を見てもひどく緊張して、落着いてゐられぬやうな風で、胸をどきどきさせながら待つてゐた。婦人たちはただもうやきもきしてゐたけれども、心の底では「きつと無罪になる」と思つて割合落着いてゐた。男の大半もさう信じてゐた。フエチコ并ツチも亦成功を確信してゐた。

「が、百姓どもは何といふでせうね？」と、近隣の地主らしい紳士が言つた。

「しかし皆百姓といふ譯でもありませんよ、あの中には官吏も四人ほごゐました。」

「さうです、四人ゐましたよ。」と州會議員らしいのが仲間に加はつた。

「だが、あの連中は本當に被告を免訴にするでせうか？」

「あれを免訴にしなければ陪審官の耻辱ですよ。」と若い役人は叫んだ。「かりに犯罪があつたとしてもです、彼はただ玄能を空中に振り廻しただけですよ。下男などを引張り出したのは不可ない。私が辯護士ならかう云つてやりますよ。被告は親父を殺しました。併し彼は無罪です。裁判も糞もあるものか。」と。

「いや、辯護士はさう主張したのですよ。尤も、裁判も糞もあるものかとは言ひま

せんでしたがね。」

「一體、免訴になるでせうかね。」と、又一人が云ひ出した。

「そんな事になつたら、明日は中央旅館の引つくり返るやうな騒ぎが始まるでせうよ。まづ七日間は飲み續けますね。」

鈴が鳴つた。陪審官は丁度一時間だけ評議を凝らした。一同席に着くや否や、深い沈黙が法廷を支配した。裁判長は型の如く最初の問を發した。

「被告は金子を盗む目的で、豫め謀つて殺人罪を犯したでせうか？」

法廷は寂とした。陪審官中の主席は死んだやうな法廷の静けさの中に、明らかな聲で、

「さうです、有罪です！」

同じ答へが他のあらゆる間に對して繰返された。こんな事は誰も思ひも掛けなかつた。誰しも少しは酌量されるだらうと豫期してゐた。法廷は隅から隅まで化石したやうに見わた。が、それも一瞬時で、直ぐにがやくといふ聲が續いた。婦人連は殆ど一撥でも始めるかと思はれた。皆椅子から飛上つた。

「何うするのです、これから何うするのです！」

皆裁判がすぐに取消されて、遣り直しになるとでも思つてゐるらしい。その瞬間ミ

ーチャは不意に立つて、両手を伸ばし乍ら、胸も裂けるやうな聲で叫び出した。

「神と神の怖るべき審判の日によつて誓ひますが、私は私の父親の血に對して罪は

ありません！ カーチャ、私はお前を赦してあげる！

兄弟よ、友よ、も一人の女

をも憐んでやつて下さい！」

彼はそれをまだ言終らないうちに、法廷中に聞けるやうな大声でわつと泣出した。その泣聲は、彼の平生とは違つた、思ひもよらぬ不思議な聲で、何うして彼に突然こんな聲が出たのか誰にも分らなかつた。すると廊下の一番後の隅から魂切るやうな女の泣聲が聞けた。それはグルーシヤであつた。彼女はもう先刻誰にか頼んで、辯論の初まる前にまた法廷へ入れて貰つたのであつた。ミーチャは法廷から連出された。宣告の發表は明日まで延された。法廷中は上を下への大騒動になつた。私は法廷を出ようとしながら、階段の上で、こんな聲を聞いたことだけを覺てゐる。

「二十年間は鑛山の臭を嗅がなきやなるまい。」

「まあそんなものだらう。」

「當地の百姓どもは自分の意見を押し通したんです。」

「これでミーチャも遂々お終ひだね！」

十二 終 結

ミーチャは二十年の流刑を宣告された。

イヴンは裁判の後直ぐに意識を失つたが、そのままカテリーナの家に引取られた。カテリーナは世の取沙汰や蔭口をすつかり無視して、妄想症にかゝつて今は人事不省の彼を自分の家に運ばせ、自分の手厚い看護の下に、一日も早く回復の日の來るのを待つことにしたのである。

公判後五日目の朝早く、アリヨージヤはカテリーナを訪問した後、ミーチャの寢てゐる病院へ急いだ。ミーチャは判決の翌日から神経性の熱病に罹つて、町立病院の囚人室へ送られてゐた。

『ねね、兄さん。』とアリヨシーシャは兄の部屋へはいりなり言ひ出した。『カテリーナさんは来ますよ。今日来るか、それとも二三日のうちに来るか、それは分りませんが、来ることはきつと来ますよ。』

ミーチャは聞くなり身慄ひした。刑地に出立するまでに彼女に會つて一言詫びが言へるかごうかは、彼にとつて何よりの氣がかりだつたのだから、この報知はひどく彼の心を打つたのである。彼は彼女との對話を詳しく聞きたかつたが、それは恐ろしくて、彼は黙り込んでしまつた。

『あの女は何うかして脱走についてのあなたの良心を安堵させたいと思つて、種々なことを言ひましたよ。』とアリヨシーシャは續けた。『その時までには若しイワンが全快しなかつたら、あの女が脱走の手筈をするさうです。』

『それはもう聞いたよ。』と、ミーチャは考へながら言つた。

『ちや、あなたはグルーシヤにこの事を言ひましたか。』

『言つたよ、彼女は今朝来ないがね。』とミーチャは何だか悸々しながら弟を見て、『昨夕来たんだよ。で、僕がカテリーナのいろいろと世話してくれることを言つたら彼女は黙つて唇を歪めたよ。そしてたゞ「やらせて置くがいいわ!」と言つたきりさ。脱走が重大なことだといふ事は分つたらしいが、僕はその上探つてみようとはしなかつたんだ。彼女はカテリーナが今では僕を愛してゐる人ではなくて、イワンを愛してゐるのだといふことを分つてゐるだらうか?』

『さあ、分つてるでせうか?』

『或は分つてゐないかも知れない。何しろ今朝はまだ来ないからね。』とミーチャはまた急いでかう言つた。二人の會話は、それからイワンの病狀に移つて行つて、やがて自らそこに沈黙が来た。沈黙は長くつづいた。ミーチャは何か重大なことを心配してゐるらしかつた。

『アリヨシーシャ。』と彼は突然、涙に充ちた慄々聲で言ひ出した。『アリヨシーシャ、僕

はね、非常にグルーシヤを愛してゐるんだ。」

『でも、政府はあの女をあなたといつしよにシペリヤへゆくことを許してはくれな
いでせうね。』とアリヨシヤは兄の言葉を受けてかう言つた。

『いや、そのことばかりぢやないんだ。』とミーチャは響のある聲で續けた。『たとへ
グルーシヤと一しよに行かれるものとしたつて、……やつぱり僕には覺悟が足りな
いやうだよ。若し途中で「彼處」へ行つてからか役人どもに打たれでもしたら、僕
にはとても我慢が出来ないよ。僕はそいつを殺すかも知れない。そして僕自身も銃
殺されるんだ。ここですら僕のことをもう「貴様」と呼びやがる。いや、昨夜も夜つ
びて考へたんだが、僕にはまだ覺悟が足りないよ。僕は讚美歌が歌ひたいんだが、
しかし看守共の亂暴は我慢がならないんだよ！ グルーシヤのためなら何でも忍ぶ
……何でも……けれども撲られたりなんかしちや。……だが、彼女を「彼處」へつれ
てゆくことはとても許されやしないよ。』

アリヨシヤは靜かに微笑んだ。

『ねね、兄さん、私はそのことについて。』と彼は言つた。『も一度あなたに言ひます
がね、あなたは私が嘘を言はないつてことは知つてらつしやるでせう。ねね、兄さ
ん、あなたは覺悟が足りないのです。そんな十字架はあなたに必要ありませんよ。
のみならず、そんな大きな苦痛を與へる十字架は覺悟のないあなたに斷じて必要あ
りません。若しあなたが實際にお父さんを殺したのなら、私はあなたが十字架を遁
れようとなさるのを悲しむかも知れません。けれどもあなたは無罪なんです。そん
な十字架はあなたにとつて重過ぎるのですよ。あなたは苦痛によつて、自分を他の
人間に生れ更らせようと思つていらつしやる。が私の考へでは、たとへあなたが何
處へ逃げていらつしやらうとも、その新しい人間は必ずあなたから生れますよ。あ
なたがこの十字架の苦痛を受けるに堪へないといふことは、あなたが自分の内部に
もつと大きな責務を感じていらつしやる證據なんです。さうしてこの不斷の感じは

將來、あなたの生涯に於て新しい人間の出生を助けるものなんです。それはあなたが「彼處」へいらつしやるよりもつとよいことなのです。何故かと言へば、彼處へ行つたらあなたは苦痛を忍ぶことが出来ないで、反つて不満を起し、遂に「俺は償つた」と云ふ氣がして來るに違ひないからです。人はどんな重荷をだつて負ふことが出来るといふわけにはゆきません。どうしても重荷を負はなければならぬとすれば、負へるやうにして負ふより他はありません。それに、若しあなたが脱走なさつたために責任が他の人々に、例へば護送の將校や兵卒たちに及ぶやうなら、わたしはあなたの脱走を許しはしません。けれども、(護衛官もイワンさんに言つたことですが)巧くやりさへすれば、問題も起らず面倒なことにもなるまいといふことです。無論、賄賂を使ふのはよくないでせう。けれどもこんな場合にそんな事位は問題にしてはゐられません。ですもの、若しイワンとカテリーナとがあなたのために賄賂を持つて行つてくれと私に頼みでもしたら、私は出かけて行つて賄賂を使

ふに相違ありませんよ。私にはあなたの行爲を裁くことは出来ないのです。私は決してあなたの罪を認めません。さうです、ごうして私はこの事件に於てあなたの裁判者になり得ませう。』

『だが、その代り僕は自分で自分の罪を認めてゐるんだ。』とミーチャは叫んだ。『僕は脱走するつもりだ。これはお前に言はれたからちやなく、自分でさう決めたのだ。ミーチャ・カラマーゾフはごうして逃げずにゐられやう。が、その代り僕は十分自分の罪を認める。そして彼處へ行つて永久に罪障の消滅を期する積りだ！ かういふと何だか詭辯のやうだね。だが、まあ聞いてくれ。僕の決心といふのはかうなんだ。僕はたとひ金と旅行券とを持つてアメリカへ遁げても、喜びを得るのでもなければ幸福を受けるのでもない、ただ別の監獄へ行くに過ぎないのだと考へて、自分で自分を勵ましてゐるんだ。アメリカよりもシベリヤがよいかも知れない！ ほんとにその方がよいかも知れないよ。僕はあのアメリカを今ではもう嫌つてゐる。たとひ

グルーシヤと僕と一しよに行くとしてもさ。第一彼女を見るがいい、彼女をアメリカ女と思へるかね！ あれはロシアの女だ。純粹のロシア女だ。彼女はホームシツクに罹るに相違ない。あれが毎日僕のために悲しみ、僕のために十字架を背負つてゐるのを見なけりやならない。だが、彼女に何の罪があるだらう？ それに僕だつて、どうしてアメリカの無頼漢ごと一緒に暮して行かれよう？ アメリカ人は一人残らず僕より善良かも知れないが、然しやつぱり無頼漢なんだ。今ではもう僕はアメリカは嫌ひだ！ 到底僕の衷心の友じゃない。僕はロシアを愛してゐる。アリヨシヤ、僕自身は悪者だが、しかし僕はロシアの神を愛してゐるんだ！ だが、多分僕は彼處の土となるのだらうと思つてゐる。』彼は急に眼を輝かしてかう叫んだ。彼の聲は涙で慄れてゐた。

『でねね、アリヨシヤ、僕の決心はかうだ、まあ聞いてくれ。』と、彼は波立つ心を抑へながら言葉を次いだ。『僕はグルーシヤと二人であすこへ行くとなる、——そ

こですぐ何處か人里離れた遠い所へ行つて、熊を相手に百姓をする積りなんだ。さて、僕等はすぐに文法の勉強にかゝるんだね。三年間働きながら文法を勉強する。そして英國人と少しも違はない位に英語を覺え込んだ。英語を覺え込んだら、もうアメリカにはおさらばだ！ そしてアメリカ人になりすまして再びこのロシアへ歸つて来る。心配するな、この町には来やしないから。北か、それとも南の何處か遠い田舎に隠れるんだ。それまでには僕は變つてゐる。彼女も變つてゐる。アメリカの醫者に、顔へ疵か何かこさへて貰ふさ。それとも、片眼を潰して一アルシンも髭を伸ばすさ。白い髭をね。ロシア戀しさに髭も白くなるだらうよ。——さうすりや誰にも分りやしない。もし見附かつたらまたシベリヤへやられる迄さ。つまり運がないのだからね。とに角、歸つて来て何處かの山のなかで百姓をするよ。そして一生涯アメリカ人で通すよ。さうすりや、故郷の土に骨を埋める事が出来る譯だ。之が僕の計畫だ。固く決心したんだよ、お前、賛成してくれるか？』

『賛成します。』とアリヨシヤは言つた。彼は兄に對して反對したくなかつたのである。

ミーチャは一寸黙つてからまた喋舌りだした。

『それにしても、奴等が法廷でしたことは何うだ？ 何といふ遣り方だらう？』

『奴等はたとひあんなことをしなくても、やはりあなたに罪を着せずには置きませんよ。』とアリヨシヤは溜息を吐いて言つた。

『さうだよ、僕はこの國の人間には愛想が盡きたよ。もうつくづく厭になつた！』と、ミーチャは苦しうに言つた。

また、暫く沈黙が來た。

『アリヨシヤ、今すぐに僕を救つてくれ！』と彼は急に叫び出した『カテリーナは今すぐに來るか？ ござだい、聞かせてくれ！ 彼女は何と言つたい？ 何う言つたい？』

『來るとは言ひましたが、今日直ぐに來るか何うか、そりや分りません。彼のひとは來るのが辛いのですよ！』アリヨシヤはおどろした眼附で兄を見た。

『だが彼女はまだ苦しみが足りないよ、まだ辛さが足りないよ！ アリヨシヤ、僕はそれを思ふと氣が狂ひさうだ。グルーシヤは始終僕を見てゐて、僕の心持を了解してゐる。ああ、神様、私を落着かせて下さい、私は何を求めてゐるのでせう？ 僕はカーチャを求めてゐるんだ！ 僕は何のためにカーチャを求めらるのだらう？ それはカラマーゾフ一統の呪ふべき放縱性のためだ！ さうだ、僕はまじめに苦しめない男だ！ 皆が言ふ通り、僕は悪者なんだ！』

『や、あの女が來ました！』と、アリヨシヤは叫んだ。

この瞬間突然にカーチャが闕の上に現はれた。と、忽ち彼女は、喪心したやうな眼附でミーチャを見ながら立止つた。ミーチャは衝と立上つた。彼の顔には驚愕の色が現はれてゐた。彼は眞蒼な顔をしたが、その唇には忽ち怦々とした謝罪するや

うな微笑が閃めいた。そして彼はいきなり我を忘れてカーチャの方へ両手を伸した。すると、カーチャも彼の傍へ馳け寄つた。彼女はその両手を掴んで、押しつけるやうに彼を寢臺の上に腰掛けさせ、自分もその傍に腰掛けた。が、やはり彼の手を放さないで、しつかりと痙攣的にそれを握りしめた。二人は何事かを言出さうとしては、それをやめてまた黙つたまま、一種妙な微笑を浮かべながら、吸ひつけられでもしたやうに互にじつと見入つてゐた。かうして二分間ばかり過ぎた。

「救してくれたのかい？ それとも救してはくれないかい？」ミィチャはたうとうかう呟いた。と、同時に、アリヨシヤを顧みて叫んだ。その顔には喜びの色が溢れてゐた。「お前には分るだらうね、僕が何を訊ねるのか！」

「だから私はあなたが好きなのよ、あなたはほんとに寛大な方です！」突然カーチャはかう叫んだ。「けれごわたし、あなたを救して上げる必要はありませんわ。却つてわたしがあなたから救して頂かなけりやならないんですわ。でも、救されても救

されなくつても——あなたつて方は、わたしの心の中に生涯の苦痛として遺つてゐますわ。そして、わたしもやはりあなたの心のなかに——さうなけりやなりませんわ……」

彼女は息を繼ぐために一寸言葉を切つたが、また我を忘れたやうに早口に言ひ始めた。「わたしは何のために來たんでせう？ あなたの膝に縋りつくために、こんなに堅く、モスクワでもこんなに堅くあなたの手を握りましたが、こんなに堅くあなたの手を握るために、あなたはわたしの神で、わたしの喜びだといふことを再た改めて言ふために、わたしは狂氣になるほどあなたを愛してゐるとあなたに言ふために、私はここへ來たのでせうか？」彼女は苦しげに呻くやうにかう言つて、いきなり激しく彼の手に唇を押しつけた。

彼女の眼からは涙が溢れ出た。アリヨシヤは黙つたまま、その様子を氣遣ひながら立つてゐた。彼は今眼の前に見てゐるやうな事が起らうとは少しも豫期してゐ

なかつたのである。

『ミーチャ、戀は過ぎ去りましたわ!』とまたカーチャは言ひ始めた。『けれど、その過ぎ去つた思ひ出がわたしには大切なものよ。この事は何時までも覚えてゐて頂戴よ。けれど、今ではもう、成るやうになるがいいわ。』と彼女は歪んだ微笑を見せながらかう囁いて、まだ悦ばしさうにミーチャの顔を見た。『あなたも今では他の女を愛していらつしやるし、わたしも他の男を愛してゐますけれど、わたしはやつぱり永久にあなたを愛しますし、あなたもわたしを愛して下さるわ。わかつて? ね、わたしを愛して頂戴な、一生涯愛して頂戴な!』と、彼女は脅すやうに聲を震はして叫んだ。

『愛しますよ、そして……知つてるかね、カーチャ』と、ミーチャは一言毎に息を継ぎながら言つた。『僕が五日前のあの時にも、あの晩にも、お前を愛してゐたといふことを……お前が卒倒して連れ出されたあの時にも、僕はお前を愛してゐたんだ』

……一生涯! さうだ、一生涯我々の愛は變らないよ。一生涯變りやしない……』
彼等二人は殆ど無意味な狂氣染みたことを囁き合つた。その言葉は眞實でなかつたかも知れない。が、少くとも、その瞬間だけは眞實であつた。彼等自身も亦自分の言葉を絶対に信じてゐた。

『カーチャ。』とミーチャは俄かに叫んだ、『お前は僕が殺したのだと信じてゐるかね? 今信じてゐないことは分つてゐるが、あの時……お前が證言をしたあの時……きつとあの時にはさう信じてゐたらう!』

『あの時も信じてゐやしなかつたわ! 一度も信じたことはないわ! あなたが憎くなつて、急にさう信じ込ませようとしたけれど、あの瞬間にね、……證言をした時にね……一生懸命にさう信じようとしたけれど……證言を終ると、もうすぐに信じられなくなつたのよ。本當よ。あゝ、忘れてゐました、わたしは此處へ自分を罰しに來たのでした!』と、彼女は急にたつた今までの甘ねたやうな囁きとは全く別な、

新しい口調でかう言つた。

「カーチャ、お前はさぞ苦しいことだらうね！」と、ミーチャは我知らず口走つた。

「もうわたしを歸して頂戴。」と、彼女は囁いた。「また來ますわ。けれど今は苦しくつて堪らないわ！……」

彼女は立上つたが、突然高く叫んで、たちたちと後へ退つた。グルーシヤが音も立てずに、不意に部室のなかへはいつて來たのである。それは誰一人思ひがけなかつたことであつた。カーチャはつかく、と戸口の方へ行つたが、グルーシヤと擦れ違ひざまにふと立止つた。彼女は白墨のやうに眞蒼になつて、靜かに、囁くやうにグルーシヤに言つた。

「わたしを赦して下さいな！」

グルーシヤは頑固にカーチャを見詰めてゐたが、一寸合間を置いて、憎惡に満ちた毒々しい語調で答へた。

「わたしも悪いのですよ！ お前さんもわたしも二人共悪いのですよ！ 赦すなんて、何方が許すんでせう。お前さんがですか、それともわたしがですか？ どうぞ

あの人を助けて頂戴。さうすりや、一生涯わたしお前さんのために祈つてあげるわ。」

「ぢや、グルーシヤ、お前は赦したくないといふんだな！」と、ミーチャは狂氣染みた聲でグルーシヤを詰つた。

「心配なさらないがいいわ。わたし、あなたのためにきつとこの人を助け出してあげるわ！」と、カテリーナはかう呟くと、いきなり、部屋の中から駆け出してしまつた。

「お前も彼女を赦さなくてははいけない。彼女は「赦してくれ」とお前に言つたんだよ。」と、ミーチャはまた悲しさうに叫んだ。

「ミーチャ、この女を責めちやいけませんよ。あなたにこの女を責める権利はない

「のぞく！」と、アリヨリシヤは兄に向つて熱心にかう言つた。

「あゝ言つたのは、あの傲慢な女の口先まばかりなのよ、心からぢやないんだわ。全く偶然に入つて来てその場の事情を少しも知らなかつたダルトシヤは悪々しさうにかう言つたのである。『あの女が若し本當にあなたを助け出してくれたら、——そしたら、すづかり赦して遣るわ。……』」

アリヨリシヤは、すぐにカーチャの後を追つて行つた。カーチャはアリヨリシヤに言つた。「いゝね、わたし、あの女の前に自分の罪を認めることは出来ません！

わたしがあの女に「わたしを赦して下さい」と言つたのは、何處までも自分を責めようと思つたからなんだわ。それなのにあの女は赦してくれません……ですけど、わたしあの女のおそこが好きですわ！」と、カーチャは不自然な調子でかう附加へた。彼女の眼は生々しい憎悪に輝いた。

「兄はこんな事にならうとは夢にも思はなかつたんです。」と、アリヨリシヤは啞い

た。「兄はあの女が来やしないと思つてゐたのです……」

「それはさうでせう。ですが、そんな話は、もう止ませう。」とカテリーナは言つた。……「わたしは將來どうしたつてあの人達を捨てはしないと、さう言つて頂戴ね。夜の祈禱の鐘が鳴つてゐますわ。さあ、もうお別れませう。」

大正十二年五月二十日印刷
大正十二年五月廿五日發行

カラマゾフ兄弟
定價金壹圓貳拾錢

不許複製

著者 北川 劉吉

發行者 福岡 益雄

印刷者 谷口 熊之助

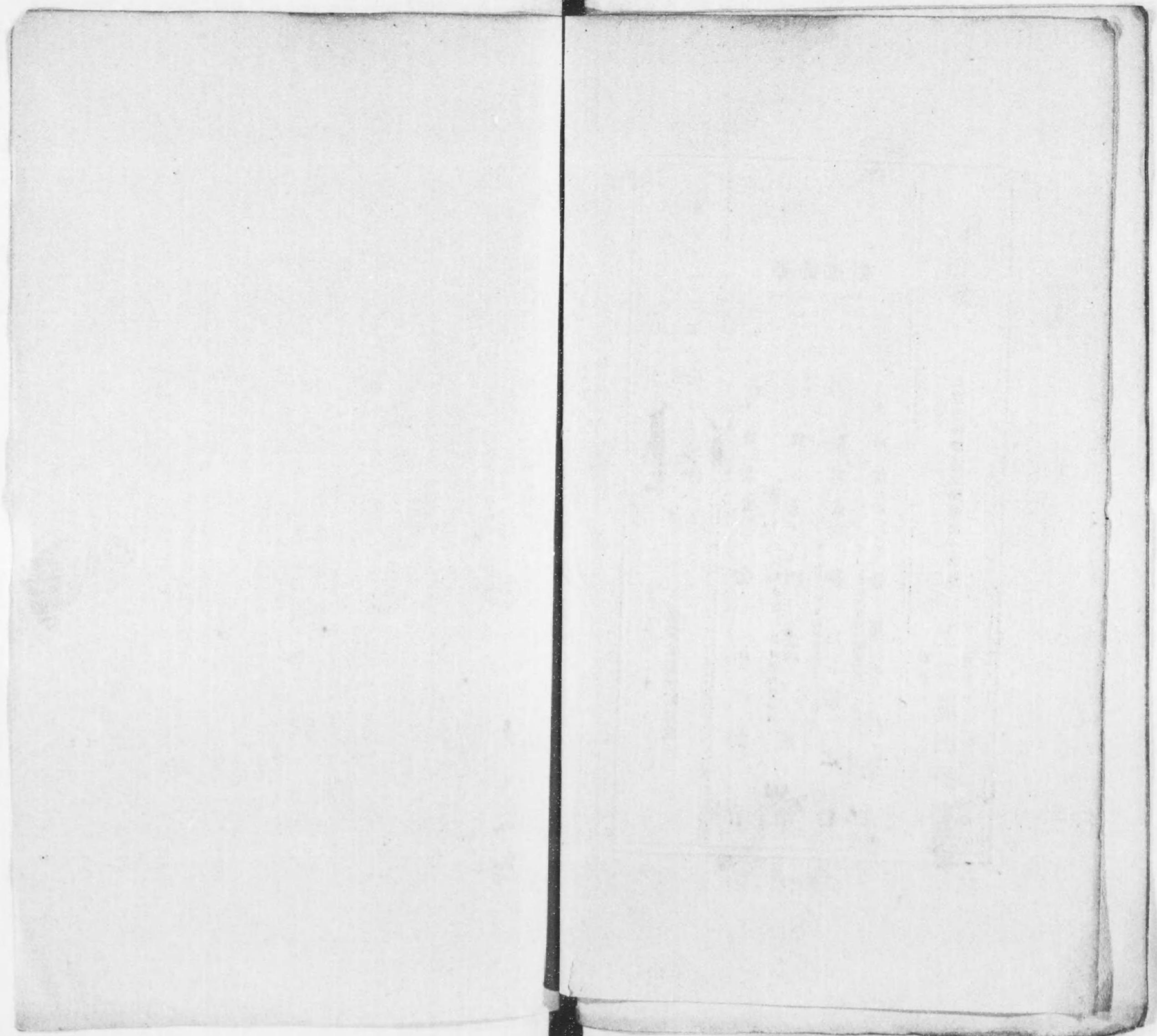
印刷所 金星堂印刷部

發行所

東京市神田區表神保町十番地

上方屋出版部

振替東京二六三六番
電話神田四三八三番



288
18

近代名著物語叢書

- | | | | |
|----|------------|-----------|------|
| 1 | ドストイェフスキイ | 虐げられし人人 | 中村白葉 |
| 2 | ゾラ | ナナ | 笹村茂 |
| 3 | モウパンサン | 女の一生 | 北川劉吉 |
| 4 | トルストイ | 闇の力 | カ石平三 |
| 5 | アレクサンドルアサフ | 最後の線 | 佐伯伸吉 |
| 6 | | 罪 | |
| 7 | ダンメ | 死の勝利 | カ石平三 |
| 8 | トルストイ | 復活 | 小島鏡 |
| 9 | | 母 | |
| 10 | アレクサンドルアサフ | サニ | 佐伯伸吉 |
| 11 | ドストイェフスキイ | カラマゾフ兄弟 | 北川劉吉 |
| 12 | ゾラ | 金 | 笹村茂 |
| 13 | | 戦争と平和 | |
| 14 | | ドミゼラブル | |
| 15 | ドニコフ | モント・クリスト | 田中義雄 |
| 16 | イブセン | 海の夫人 | 山路疎水 |
| 17 | メレヂュコフスキイ | 神々の死 | 保高德藏 |
| 18 | | ニヤン・クリストフ | |
| 19 | シモンキネッチ | 何處へ行く | 未定 |
| 20 | | アンナ・カレニナ | |

定價一紙金七十錢 送料六錢
 書名を朱書せる分に限り 金一圓二十錢

終